七尾祇園祭にみる能登の民族スポーツ「キリコ祭り」

An anthological study on the racial sports Kiriko festival in Noto

大　森　重　宜
Shigenori OOMORI

〈要旨〉

能登は祭りの宝庫といわれる。特に夏・秋，能登全域で行われるキリコ祭りは現在100を超える地域で実施され，キリコの総数は900以上にのぼる。キリコ祭りは，神輿の御旅所への御神幸の際，キリコ（奉灯）と呼ばれる巨大な御神灯が氏子たちにより担ぎ出され神輿の先導，守役，側役として道中を練り歩く行事である。神霊を招きキリコの奉納と担ぎ手の狂喜乱舞をもって饗応することにより神威を高め五穀豊穣，また海の安全と大漁，水を介する流行り病への防疫などを祈願する。キリコを担ぐという身体運動は，その参加者に陶酔と連帯感をもたらす。七尾祇園祭奉灯行事は，自らと他者の激運動および身体的痛みを伴う陶酔を共有することにより「祈り」や「悼み」を分かち合う。これは「祭り」と「スポーツ」の 原義的共通性であると思われる。

〈キーワード〉
キリコ祭り，七尾祇園祭，スポーツ人類学

1　緒言

能登は祭りの宝庫といわれる。特に夏・秋，能登全域で行われるキリコ祭りは現在100を超える地域で実施され，キリコの総数は900以上にのぼる。キリコ祭りは，神輿の御旅所への御神幸の際，キリコ（奉灯）と呼ばれる巨大な御神灯が氏子たちにより担ぎ出され神輿の先導，守役，側役として道中を練り歩く行事である。神霊を招きキリコの奉納と担ぎ手の狂喜乱舞をもって饗応することにより神威を高め，五穀豊穣また海の安全と大漁，水を介する流行り病への防疫などを祈願する。そしてキリコを担ぐという身体活動は，その参加者に連帯感と陶酔をもたらす。元より古代ギリシャのオリンピックなどは神々への奉納祭典競技である。日本の祭に最も多い例は趣向を凝らした祭庭での催しものであり，柳田國男は相撲や綱引きなどわが国在来の運動競技のほとんどその全部が祭の催し物に始まっているとしている。したがって古代ギリシャの奉納祭典競技と日本の相撲などとはその目的で共通する点があると言えよう。キリコ祭りは激しい身体活動を祭庭で行う行為であり，この意味から能登のキリコ祭りはスポーツとその本質で類似性を持つ。しかしこれまで日本の祭をスポーツ的視点から調査された先行研究はほとんど見られない。本調査研究ではこの激運動をともなうキリコ祭りは能登の人々にとっての民族スポーツそのものであり，この「まつり」をスポーツ人類学[1]の立場から調査検討することにより祭りそのものの意義とスポーツ的役割について考察，検討することを目的とする。

2　七尾祇園祭

2−1　能登の山車祭り

能登半島で行われる祭りの多くにダシ，ヤマ，キリコ，ホウトウと呼ばれる山車，山鉾，屋台などが曳きまわされ，また担ぎ出される。特に七尾市地域を中心に行われる山車祭りは三つに分類できる。一つは七尾祇園祭と同じく大地主神社の例大祭，国無形重要文化財「青柏祭」の「でか山」[2]にみられる人形山である。山車の上に人形を飾りつける「単層露天四輪」構造である。また気多本宮神社の「ちゃんちき山」[3]，七尾市田鶴浜町の住吉大祭の曳山では下層の地山の上に上山を重ねる「二層露天四輪」である。これらは曳山上に人形が飾られことが特徴である。これに対し灯籠山は曳山内部に明かりを設置して運行する。珠洲市寺家大祭，能登町宇出津のあばれ祭り，輪島市の輪島大祭などで出される灯籠山（行灯山）はキリコと呼ばれ，七尾市印鑰神社の互市祭り，大地主神社祇園祭，気多本宮の夏祭り，石崎奉灯に出される灯籠山は奉灯（ホウトウ）と呼ばれる。キリコや奉灯は通常担いで運行する舁山であるが，珠洲市寺家大祭の巨大なキリコや能登島向田の火祭りの奉灯は四輪が付けられ曳行されている。この灯籠山系には志賀町富来の八朔祭りの「お明かし」，能都鵜川のにわか祭り，内

浦町の小木祭りの袖キリコ（にわか）などがある。また七尾市中島町のお熊甲祭り，同中島町藤瀬の新宮納涼祭，富田町の六保祭りで出される巨大な枠旗の山車がある。枠旗は山車や屋台，鉾の中でも鉾が装飾化，巨大化されたものである。

２－２　七尾祇園祭縁起

祇園祭は京都八坂神社の祭礼で祇園会・祇園御霊会ともいわれる。平安期，厄除神，防疫神として貞観十一年（869）６月全国にわたる疫病流行に際し，これは午頭天王の祟りによるものとして勅を奉じて六十六本の矛を立ててこれを祭り，その消除を祈った事に由来する。［神道史大辞典 2004：266－270］

七尾祇園祭は大地主神社の夏越祭りで，毎年７月の第２土曜日に行われる。古くは祇園午頭天王社とよばれ，京都祇園祭を能登に勧請し，毎年６月14日（明治の改暦により７月14日）に祇園会を行ったことが起源とされる。祇園午頭天王社は戦国期の七尾城落城の時兵火にあったものの天正６年（1578年）の棟札が現存している。藩政期の寛永12年（1635年）府中村山王森山王社境内に遷座し，明治15年（1882年）両社を合わせて大地主神社となった。七尾祇園祭は一般には「東のお涼み」,「東の奉灯祭り」あるいは「山王のお涼み祭り」などと呼称するが，実際には「天王社の祇園祭」であり，七尾市山王町鎮座「大地主神社祇園祭」である。能登全域でキリコと称される山車類は，七尾では奉灯（ほうとう）と称する。

２－３　祇園祭の概要

祇園祭本儀１ヶ月前，大地主神社社務所に奉灯を奉納する12町の各町会長，氏子総代，指揮者，奉賛会会員などが集まり「籤取り式」が行われ宮入などの順番が決められる。祭礼前日夕刻，各町指揮者などの運行責任者が神社の社参し，最終打ち合わせ会が行われる。またこれに先立ち奉灯に乗り，笛，太鼓，鉦を打ち鳴らす各町の子ども達総勢120名による安全祈願祭と祭囃子の奉納が行われる。

祭礼当日午後３時ごろ各町内の幼児，親，小学生による「ヤッソーヤッサ」と称する祭りの前触れが行われる。竹棒をロープなどで結びヤッソーヤッサの掛け声とともに一斗缶を打ち鳴らし町内を巡回する。午後３時過ぎ大地主神社奉賛会，各町会長，氏子総代により神輿の出御祭が執り行われる。その後４時ごろ12町内の女児による「奉灯音頭踊り」が先導となって神輿が湊町の仮宮まで神幸する。戦前は旧府中村の女児による手踊り，「府中村踊り」が行われていた。

11町の奉灯は担ぎ出され，それぞれの町内を練り，花（祝儀）を集めて午後８時30分ごろ仮宮前に勢揃いする。仮宮前で乱舞の後，各町の奉灯はそれぞれ神前にて清祓・奉納祭が執り行われ，各町に御幣と指揮者襷が授与され，御幣は奉灯高部欄上に立てられる。

11町全ての奉灯の奉納祭が終了すると祇園祭本儀が執行される。その後11町の奉灯は籤取り式で定められた順に神輿の先導として大地主神社へ向かう。神社到着後午後11時ごろに各町の奉灯は籤順に従って境内に焚かれた篝火の回りを乱舞する。この奉灯が乱舞する様を「あばれる」と称し，ひとあばれの後所定場所に置かれ，御幣が外されて町会長と指揮者により神社拝殿に納められる。その後籤で決められた町衆により神輿が担がれ大地主神社拝殿前に移された後，神璽が神輿から大地主神社本殿に還御され還御祭が執り行われる。

神事の後，当番町の先導による「七尾まだら」が参加者約1000名により合唱され奉灯は各町に帰還する。

２－４　奉灯（キリコ）の構造と形式

その形態は「単層露天舁山」の構造で，11町とも担ぎ棒の上に「灯籠山」である。白木造りや朱塗り黒塗りなどの塗りを施したものがあり，小型のものは台棒の下に櫓を履かせて安定させ，大型のものは胴を４本の柱で支える。各町内の小学生男女による横笛，太鼓，鉦による囃子方の囃子に合わせ30人から100人の担ぎ手が足と肩を揃えて「サカセイ，サカサッセイ」と掛け声を掛け合いながら練りまわる。

２－５　奉灯（キリコ）の造形と趣向

奉灯は一般に20年～30年で新たに造りかえられてきた。胴前面に文字，胴背面に絵画を描き胴の上部に高欄を巡らす。胴の最上部に切妻の屋根を掛け幕を張り，屋根より御神灯（雪洞）を垂らす。前面背面とも木駒で止めた張綱２本で引く。また胴の上部に榊枝を立て，仮宮社参の際に拝受した御幣を立てる。その趣向造形は各町により異なる。

①川原町

胴前面に「能登海」，胴背面に「森蘭丸本能寺の変図」を描き胴の上部の高欄に川原町と書く。切妻屋根より吹き流しを吊るす。

②塗師町

胴前面に「飛上跳」，高欄に塗師町が町の氏神として祭る天神の梅鉢紋を置く。胴背面に「楠正行図」を描き高欄には日章旗旭日旗を据える。

③郡町西部

胴前面に「歓無極」の切り抜き文字を張り胴背面に「川中島合戦図」を描き，高欄前面は郡町西，背面に祇園祭と書く。高欄に郡町西と書かれた雪洞，紅白の天王社社紋染め抜き旗を一対立てる。

④郡町東部

胴前面に「寿無極」欄間に「静風」と書き，胴背面に「橋弁慶図」を描く。高欄上に日章旗，旭日旗を一対立て，胴脇高欄の前後に紋入り板と提灯を吊るす。

⑤湊町一丁目

胴前面に「聯飛龍」を書き胴背面に「天照大神，素戔嗚尊図」を描く。高欄上に日章旗旭日旗を立てる。

⑥湊町二丁目西部

胴前面に「福和来」欄間に「祇園祭」を書き，胴背面に「宇治川之合戦図」を描く。高欄上に黄色の祇園の木瓜紋旗を一対立てる。前後４本の張り綱に朱色房を垂らす。

⑦湊町二丁目東部

胴前面に「風気涼」欄間に「静風」と書き，胴背面に「龍図」を描く。高欄上に日章旗旭日旗を立てる。

⑧鍛冶町

胴前面に「午頭天王」欄間に「鍛冶町」と書き胴背面に午頭天王図を描く。これは藩政期以前に天王社が鍛冶町に鎮座していたためであり，祭神素戔嗚尊が午頭天王とは神仏習合で同じ神であるとされる。高欄上に日章旗旭日旗を立てる。

⑨山王町

胴前面に「破天荒」欄間に「山王町」と書き，胴背面に「前田利家賤ヶ岳合戦之図」を描く。高欄上に日章旗と旭日旗を立て，胴脇高欄に提灯を吊るし台棒前後に提灯を取り付ける。

平成24年度祇園祭

⑩上府中町

胴前面に「開寿域」欄間に「福星」と書き，胴背面に「高田馬場仇討図」を描く。高欄上に日章旗一対を立てる。

⑪本府中

胴前面に「奔清泉」欄間に「本府中」と書き，胴背面に「楠正行図」を描く。高欄上に日章旗旭日旗を立てる。

⑫今町は七尾市中心地区ながら戸数の減少により，参加が厳しい状態となり不参加。

３　キリコ祭りの維持継承

３−１　七尾祇園祭の組織

これまで七尾祇園祭は，各町の町会長と氏子総代からなる大地主神社山王奉賛会と奉各町灯の指揮者と副指揮者を中心に祭りを執り行ってきた。またそれぞれの町内での予算，運行予定や役割分担などは町内により決定されてきた。しかし平成23年度よりさらに厳粛で安全なより良い祭りを目指して指揮者，副指揮者から組織される七尾祇園祭実行委員会を立ち上げ，祭りの現場の声を取り入れることにより問題点を明らかにして厳粛，連帯，楽しみの共有，安全，祭りの維持継承を目指すようになった。

大雨に見舞われた平成24年度祇園祭反省会での各町意見は以下のようなものであった。

- **１番町**：仮宮前での紙吹雪はＡ町の住民と祭り翌日の有志により掃除がなされて大変良かった。明年も紙吹雪はあった方が良い。奉灯に使われる電灯はLEDとバッテリーを本年より使用することによりさらに美しくなった。
- **２番町**：二番籤を引き当て神輿宮入の担ぎ手の栄誉を得たが，当日その時間帯に人数が不足したため他町若衆達の協力を得て無事務めることが出来た。
- **３番町**：屋根をぶつけ壊してしまった。やっこ（寄付）の要請が他町からあった。今後の課題ではないか。
- **４番町**：先行する町内と接触しそうになった。雨の日の紙吹雪は掃除が難しくなり，迷惑をかけるのではないだろうか。
- **５番町**：Ｅ町の奉灯はサイズが大きいため運行の際に街灯を取り外さなければならない。他町の方々の協力で速やかに外すことが出来た。ありがたかった。
- **６番町**：毎年６月から準備を進めるが，本年度は太鼓の修理を含め２月より準備をした。町内がまとまって活動する行事はこの祇園祭などの祭行事のみであるためとても大切である。なお本年は大雨のため逆に最後まで大勢で担ぐことができた。
- **７番町**：奉灯を子ども奉灯２基とともに改修した。大変気合いが入っていた。
- **８番長**：祭り前の実行委員会および指揮者会議で確認し

たタバコのポイ捨てを防止するため，各町が灰皿などを準備しておりタバコを捨てる人が大変少なかった。しかし少数のポイ捨てが反対に目についた。

- **9番町**：毎年奉灯を接触事故で壊していたが本年は無事であった。
- **10番町**：町内で祭りにつきものの喧嘩があった。他町に心配をかけた。神社の幟旗は全ての奉灯が祭場を出てから降ろすことになっていたが少し早かった。これに合わせ奉灯の灯も早めに消してしまった。
- **11番町**：大地主神社境内では紙吹雪は自粛するとの共通理解であったが実施してしまった。タバコのポイ捨てがあった。仮宮の祭る広場で屋根を壊してしまった。最後の「七尾まだら」は各町の協力で踊りとともに大変満足のいく出来であった。

祇園祭実行委員会が指揮者を中心に組織されたことは画期的である。祭りの在り方とその意義などについて論議し後世に繋ぐことに大きな力となると思われる。平成24年度の反省会では豪雨の中，町内及び参加者人々は逆に結束力が高まり，大人数で祭りが行われ大変良い祭りであった。来年もよい祭りにしたいとの共通意見が採択された。

3−2　世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems:GIAHS）能登とキリコ祭り

世界農業遺産[4]とは単なる遺跡，遺産ではなく人々の生活のシステムそのものが継続されていることが重要である。能登が認定された要因は数世紀にわたる文化・祭りの継承であり，中能登・奥能登全域に広く多彩に行われるこのキリコ祭りの継続は「あえのこと」[5]とともにその象徴的存在である。能登は小集落が多く，孤立的ではあるが同質的であり，相互の関係に社会連帯性があり，宗教的「聖」によって支配され，人々はその社会的規範に従順で，強い集落意識によって行動してきた。この独特な「文化・祭礼」は「多様な生物資源」,「優れた里山景観」,「伝えていくべき伝統技術」,「里山里海の利用保全の取り組みや環境教育」存続の礎となろう。

また世界農業遺産認定，システム継承の一要因としてのキリコ祭りは能登の人々にとって重要な意味を持つと思われる。少子高齢化，過疎問題，生活の維持向上，観光資源など地域で生きる意味を考えれば単に祭りとして捉えるのではなく地域の内的発展の大きな要因となる。この内的発展論における地域政策の基本は，地域がもつ様々な資源を発掘・増殖させこれを活用して地域全体の活力をあげていくことである。この地域資源活用による地域振興の考え方の淵源ともいえる概念が内発的発展の考え方である。内発的発展のスキームは，それぞれの地域の文化的伝統を生かしつつ発展を図ることが基本となる。またこの伝統とは①地域の人々に共有される振興や価値観といった意識構造の型，②家族，村落，都市，村と町との関係といった社会構造の型，③産物加工技術などの衣食住に必要なものを作る伝統的技術の型であり，地域の経済活動のみならず，伝統的祭りには地域を維持するための要素が数多く存在するといえよう。

4　スポーツ人類学的視点から視た七尾祇園祭

英語のsportsはラテン語のdesportareに遡る。desportareは「ある場所からある場所へ移動する」から「心の塞いだ状態からそうでない状態へ移す」つまり「気晴らし，遊ぶ」を意味し，この原義は今日の動詞sportsに受け継がれている。また古フランス語では「戸外でおこなう遊びを」を指し，イギリスでは16世紀に「狩猟」19世紀に「運動競技」を意味し，現在国際語化したとされる。一方，日本の神社などで行われる「まつり」は，神をまつること。祭祀，神事，祭礼である。神霊を招き饗宴をもって歓待し慰撫して神威を高めそれに浴する儀礼である。その語源は不可視のカミが現れることをマツ（待つ）こと，出現したカミにマツラフ，服従し奉仕することであるとされる。そしてその構成要素は「聖中心性」「非日常性」「共同性」「周期性」「催事性」といった諸特性を持つ。聖なるものを求心的シンボルにして，日常生活とは異なる非日常生活の規則に従い，厳粛，厳格（儀礼性）と熱狂と放埒（祝祭性）の中で人々が一体化し（共同性），定期的に繰り返し営まれる（周期性）制度的集合体（催事性）である。スポーツ人類学者K.ブランチャード，A.チェスカが指摘したスポーツ過程と儀礼過程が類似した行動パターンであることに着目すれば，スポーツ行動の進化が儀礼的行為にその諸ルーツをもち，儀礼的行為に競技性を強調し特殊化した行為が今日のスポーツであるととらえることができる。つまりこの祭りの構成要素が脱落した催物がスポーツに変容したともいえよう。

七尾祇園祭からはそのスポーツ的要素を見出すことができる。各町は他町を意識し大きさや優美さ，激しさを競い合い，仮宮前や神輿帰参後の大地主神社境内の大篝火の周囲でその勇壮さを競い合う。またその後一番籤を引き当てた町が神輿を担ぎ境内に担ぎ込む栄誉が与えられ，奉灯を担ぐ勇ましさとは違い厳粛に神輿を「チョーサ　チョーサ」の掛け声により境内に担ぎ入れる。神輿から神璽が神社本殿に遷された後，奉灯で競い合った人々全員が二番籤を引いた町の先導で「七尾まだら」を合唱する。この時二番籤の若衆はまだらに合わせまだら踊りを披露する。この光景はラグビーのノーサイド，スポーツマンシップのそれを彷彿させるものではないだろうか。

文化人類学の父と称される*Tylor,E.B*は，習俗や観念は

これを生み出した社会が新しい段階に進んでも消失することなく，本来の意味や機能は変化させながらもなお全時代の遺制として強靭に存在するという残存（Survival）概念を後世に残した。日本においても伝承競技は卜占，吉凶占といった神意を伺うものであり，残存概念に当てはまる。催しものと酒宴は貴賓款待の大切な手段であり，神来臨にもさまざまな趣向を凝らして神々を迎えた。七尾祇園祭の奉灯は当初より卜占などの意味は持たないが，平安期からの厄除，防疫を目的として残存，継承している。奉灯（キリコ）を担ぐという身体活動は，その参加者に陶酔と連帯感をもたらす。七尾祇園祭奉灯行事は，自らと他者の激運動および身体的痛みを伴う陶酔を共有することにより「祈り」や「悼み」を分かち合う。これは日本の「祭り」と古代オリンピックなどの「祭典競技」との 原義的共通性であると考えられる。

表１．能登の山車祭りの分類

人形山	型	祭
でか山	単層露天四輪	大型：七尾市青柏祭（三台） 小型:能登町宇出津曳山祭（二輌），能登町内浦白丸曳山祭（三輌），珠洲市鵜島曳山祭（五輌）
ちょんこ山	二層露天四輪	七尾市気多本宮春祭（六輌），七尾市印鑰神社互市祭（一輌），七尾市石崎町西宮神社えびす祭（一輌），七尾市田鶴浜町住吉大祭（六輌），中能登町鳥屋（十四輌）
黒島型	二層露天四輪	輪島市門前町黒島天領祭（二輌），輪島市門前町諸岡比古神社例祭（一輌），輪島市門前町剣地お小夜祭（一輌），志賀町富来領家八朔祭（一輌）
灯籠山		祭
奉灯		七尾市印鑰神社互市祭（六基），七尾市大地主神社祇園祭（十七基），七尾市気多本宮春祭（十一基），七尾市石崎町（十二基），七尾市山崎町阿良加志古神社納涼祭（一基）
キリコ		珠洲市寺家大祭（四基），能登町宇出津あばれ祭（五十基），輪島市輪島大祭，輪島市曽々木大祭
お明かし		七尾市中島町藤瀬の新宮納涼祭（十二基），志賀町富来八朔祭（五十基）
にわか		能登町鵜川にわか祭（九基），能登町姫どいやさ祭，能登町内浦小木祭

七尾市史より改変

表２．各町の奉灯の構造形式

町　　名	台　棒	台棒長	台棒巾	胴　幅	全　高	塗	ハカマ
川原町＊	4　本	540cm	181cm	80cm	520cm	白木	有
塗師町	4　本	620cm	205cm	100cm	718cm	朱塗	無
郡町西部＊	4　本	840cm	136cm	175cm	1230cm	黒塗	無
郡町東部＊	4　本	730cm	130cm	108cm	740cm	黒塗	無
湊町一丁目	4　本	620cm	131cm	113cm	798cm	黒塗	無
湊町二丁目西部	4　本	740cm	210cm	108cm	750cm	皆朱塗	無
湊町二丁目東部	4　本	540cm	199cm	80cm	570cm	黒塗	有
鍛冶町	4　本	630cm	190cm	97cm	680cm	白木	無
今町	4　本	540cm	181cm	79cm	510cm	白木	有
山王町＊	4　本	770cm	240cm	112cm	808cm	黒塗	無
上府中町	4　本	610cm	210cm	100cm	700cm	朱金彩	無
本府中町＊	4　本	540cm	178cm	82cm	570cm	黒塗	無

＊子ども用の小型奉灯も引き出される。

註

（１）スポーツ人類学はスポーツの分析と理解に対する独特の社会学的接近であり，そこから得られた諸々の見通しを体育やレクリエーションのプログラムに生じる現実の諸問題に実践的に応用するものである。その諸目的は①通文化的視点からするスポーツと余暇行動の定義と記述。②歴史的社会や現代西洋社会以外に，未開社会，部族社会，非西洋社会，第三世界，発展途上国におけるスポーツ研究。③文化変容，文化化，文化維持，変化に対する適応の中の要因としてのスポーツ分析。④文化行動の他の諸側面を見通すものとしてのスポーツ考察。⑤先史時代のスポーツ行動分析⑥スポーツ言語分析⑦他民族文化の教育環境におけるスポーツの役割の研究⑧特別な人のためのスポーツ・レクリエーションプログラムの展開と管理⑨体育，レクリエーション，競技会といったスポーツ環境で生じる実際的問題の解決に人類学的方法を応用する⑩スポーツモデル利用した構造的余暇活動の展開⑪通文化的理解に資する態度の育成。これに加えて人類学の焦点は，スポーツにおける女性の役わり，国際理解，加齢に応じたレクリエーション，人間社会におけるスポーツと暴力など特別な問題を抱える枠組みにまでを対象とする。（スポーツ人類学入門 THE ANTHROPOLOGY OF SPORTS An Introduction　Kendall Blanchard and Alyce Taylor Cheska　p.27～28）そして具体的に文化人類学（民族学・民俗学）の方法でスポーツを研究する学問である。

（２）（３）祭りの通称なるものを見渡すと＜中略＞例えば三河で評判のテンテコ祭，能登の七尾でチャンチキヤマ，京都東北郊の赤山明神のサンヤレ祭，安芸厳島の御社でいうチンチリビツ，長崎諏訪様のコッコデショウその他これ類する多数の名称はいずれもその祭礼が行列に力を入れ，それに繰り返される囃子声または掛け声が，いつまでも耳に残り，何人もこの一語によって，この日の全体の雰囲気を思い浮かべることができる。（新編柳田國男集第五巻 p.107～108）

（４）世界農業遺産システム（GIAHS）とは国連食糧農業機関（FAO：本部イタリアローマ）がグローバル化の影響で衰退の途にある伝統的農業や文化，土地景観の保全および持続的活用の促進を図ることを目的に2002年に開始された。これまで世界各地の事例，経験を保全するため，ペルー，チリ，中国，フィリピン，アルジェリア，タンザニアなどでパイロット事業が展開されている。2011年６月，能登半島は佐渡とともに国連食糧農業機関（FAO）より世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems:GIAHS）に認定された。地域主体の管理のもと数世紀にわたり農林産物の生産，持続可能な生物資源の利用保全とそれにより育まれた「多様な生物資源」，「優れた里山景観」，「伝えていくべき伝統技術」，「文化･祭礼」と「里山里海の利用保全の取り組みや環境教育」など地域に根差した多様な資源が集約された地域であることが世界に高く評価されたためである。

（５）奥能登地方に伝承されている「あえのこと」は霜月の収穫儀礼である。現在は12月５日前後に収穫の後の田から田の神様を家に迎え入れる。種籾俵を依代として田の神を饗応する。終われば種籾は天井裏に安置される。年が明けて２月９日前後にも同様の行事を行うが，この方は田の神を田に送り返す行事とされる。霜月の祭りには田の神・山の神の去来思想が色濃く投影されている。太陽の力が最も衰える冬至の時期にあたり，人・万物の生命力が最も衰えると考えられた。この祭りは収穫祭の要素同時に，魂鎮め・魂振りが種要素であり，衰えた魂を再生復活させる。

参考文献

芦田徹郎，2001，「祭りと宗教の現代社会学」世界思想社

石川県立歴史博物館石川の歴史遺産セミナー，2012，第14回能登の祭り文化 p88～p135

宇野通，1997，「加越能の曳山祭」能登印刷出版部

Edward B. Tylor，ANTHROPOLOGY「文化人類学入門」1973，太陽選書 p221～p247

Kendall Blanchard and Alyce Taylor Cheska
2002，スポーツ人類学入門 THE ANTHROPOLOGY OF SPORTS An Introduction

菊池　暁，2007，「身体論のすすめ」京都大学人文科学研究所丸善 p76～p108

薗田稔，橋本政宣，2004，神道大辞典　吉川弘文館

新修七尾市史13民俗編，2004，七尾市史編纂室

寒川恒夫，1994，「スポーツ文化論」杏林書院 p67～p70

寒川恒夫，高野一宏，2004，「休養としてのスポーツ人類学」―民族スポーツ「博多祇園山笠」の社会組織―p144～p148　大修館書店

柳田國男，1987，　新編柳田國男集第五巻 p105～p133

吉田竜司，2010，伝統的祭礼の維持問題―岸和田だんじり祭における曳き手の周流と祭礼文化圏―竜谷大学社会学部紀要37号 p28～p42

若原幸範，2007，内発的発展の現実化に向けて　北海道大学社会教育研究 第25号 p 39～ p 49